

# 館山支部だより Vol.100

<支部連絡窓口>  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表)川村 巖  
〒294-0032 館山市笠名1357  
TEL 0470-22-0230



日本の秋の風物詩  
秋桜 (コスモス)  
<社宅の畑にて>

涼しい秋を迎えました。一方では依然として収束の兆しが見えない新型コロナウイルス禍に加えて台風シーズンの到来で気の休まる間もありません。昨年の15号・19号台風の甚大な被害を想起するにつけ、年々大型化が危惧される台風情報に戦々恐々たる感を禁じ得ないところですが、家庭・個人としてできるかぎりの災害対策を講じておくことが被害の局限上、また最悪の事態に「公助、共助」活動を円滑、有効に機能させる上で不可欠の「自助」活動として求められているところ。 <川村記>

## 支部の活動概要

<p>《8・9月活動実績》</p> <p>9月下旬 館山航空基地開隊67周年記念行事 (新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から関連行事を含め中止)</p> <p>9.26(土) 9月支部役員会(コミセン)</p>	<p>《10・11月活動予定》</p> <p>10.3(土) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉市)</p> <p>10.10(土) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)</p> <p>11 下旬 館山航空基地殉職隊員慰霊祭(時期等未定)</p> <p>11.28(土) 11月支部役員会(コミセン)</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

## 支部の機関紙・今後のあり方を模索する

支部と会員を結ぶコミュニケーション手段として、平成16年以来隔月発行を目標に続けてきた機関紙「館山支部だより」が、曲りなりにも第100号を数えたことは、活動の継続という点では「一応の成果」と言えましょう。ただコミュニケーションは「一方通行」では意味がないと思うのです。会員からの「レスポンス(反応、応答)」があつて初めて「コミュニケーション紙」として、会員との意思疎通を図ることになるのではないのでしょうか。

編集担当として忌憚のない所見を述べますと、(この17年間)会員の皆さんからのレスポンスが(極めて)少ないと言うことです。レスポンスとは「感想文とか所感文を書いて下さい」ということではなく、支部の活動に対する意見・異見・提案を含めて支部機関紙の内容についての要望等々、コミュニケーション紙の目的達成、改善に資するご意見等をお聞かせ願えれば幸甚です。

※2点目は、4年ほど前から「館山支部だより」を県隊友会のHPへ投稿しておりますが、隊友会会員以外の一般の人から、とりわけ「歴史認識」に関する掲載記事についての質問等が数件寄せられております。

会員を対象とする機関紙から、(一般の人をも対象とした)「広報紙的な要素」を兼ね備えた内容を盛り込む、このへんに今後の支部機関紙のあり方を模索する上でのひとつのヒントがあるのではと考えております。

<支部長>

## トピックス 県隊友会ホームページに力作(写真)を投稿

房日紙に度々紹介される「さざなみフォトサークル」メンバーの那覇千敬会員(理事役)に、サークル活動を通じて磨いた腕前的一端を、県隊友会のホームページで披露してもらい運びとなりました。隊友会の事業活動や部隊イベント、紹介・連絡記事など「活字・書き物」の多いホームページに彩(いろどり)を添えてくれるものと期待しております。乞ご期待!

県隊友会のHPは、小文字で「chibataiyuu」を入力して「千葉県隊友会」をクリックすれば閲覧できます。(HPの定期更新は偶数月の1日)

<支部事務局>

## レクイエム

- 8.20 渡部留五郎会員(海) ご逝去(享年69歳、支部理事役)
- 9.10 坂本 芳麿会員(海) ご逝去(享年83歳、平成27年まで支部理事役)  
支部の理事役として長年の献身・精力的なご尽力有難うございました。  
謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りいたします <支部会員一同>

## 会員の異動

- 7. 31 渡邊 嘉男会員(海、82歳) 退会申出
- 8. 22 荒木 勝利会員(海、80歳) 横浜市へ転居  
支部の会員として長年のご協力有難うございました。ご健勝を祈念致します。

## 寄稿：その後の「南極観測支援」事情 (後編)



<前号から続く> **“凄まじい”南極での空輸行動**

回転するヘリコプターのローターの下で、積荷をフォークリフトでカーゴドアーから積込む際は、フォークの運転員と機内の航空士・整備員が連携して素早く固縛し、通常3個のパレット状の積荷を手際よく処理することが求められ、昭和基地での荷卸しも同様、通常、着艦(着陸)してから発艦(離陸)までわずか数分、すべてが阿吽(あうん)の呼吸で処理されるのです。

発艦は、積載重量を誇るCH-101型ヘリですが、トルク制限ギリギリの状態でなんとか機体を持ち上げ、甲板上のクッション効果と甲板の幅を利用した助走による転移揚力を得て浮揚するという離れ技もどきの厳しい運用が求められます。特に昭和基地まで数キロという近い場所に接岸した場合、1日に40便、ワンサイクル12~3分という、絶え間のない密度の濃い連続的な作業は、まさに「凄まじい」の一語に尽きると言っても決して大袈裟ではないのです。

これらの一連の作業が安全裡に素早く、滞りなく進められるのは、格納庫での搭載物資の準備からフォークリフトによる積載作業を担当する運用科、物資の計量・仕分けをする補給科、ヘリコプターの管制を行う航海科、航空燃料の管制をする機関科そしてヘリコプター発着艦及び物資積込みの誘導を行う飛行科の各部門が、緊密に連携し合い、見事なチームワーク発揮の賜物と言えましょう。 <写真は海幕オフィシャルサイトから転載>

### 任務を終え帰国の途へ

空輸任務を終え2月上旬には昭和基地を離れることとなりますが、しばらくは(帰国)観測隊員が行う野外地点の観測や南氷洋の海洋観測などの支援を行いつつ艦は東航を続けます。オーストラリア東端の延長上はるか沖合付近から北上を開始するにつれて次第に氷山も姿を消し、3月中旬にはシドニーに入港します。久々に文明を肌で感じるひとときです。観測隊員はここで退艦して飛行機で成田へ向い我々より一足先に帰国することとなりますが、我々乗員はしばしの休養と燃料や生鮮食料品を搭載して再び北上し、桜が散り始める4月上旬に帰国、151日間・約2万理に及ぶ行程を終えることとなります。

### 南極大陸余情

南極には、南の極(はて)ならではの”不思議な珍しいもの”が数多く見られます。遙か地平線?上を転がりつつ沈みそうで沈まない夕陽、茜(あかね)色に染まった鮮やかな夕空とそれに映える雄大な氷山群。天体現象に限らず生き物の世界でも、艦が通った氷の割れ目から怪訝(けげん)な顔を覗かせるひょうきんなアザラシ一家や 延々と隊列を組んでどこからやってきてどこへ何しに向かうともしれないペンギンたち。明治末の南極探検家白瀬轟中尉も同じような光景を目にしているのです! 天変地異に見舞われないかぎり、これらは悠久不変、永遠(とわ)に見る人々に感動を与え続けることでしょう。

5回に及ぶ南極観測支援行動に従事でき、このような得難い感動を味わうことができたのも、海自のヘリコプター操縦士としての道を歩んだからこそであり、今後とも続けられる観測支援事業に後輩達があとに続くことを切に期待してやみません。 <完>

<<竹林 穂支部理事役(海)>>

## 「海軍築城」・・・赤山地下壕を解剖する

<前号から続く> 赤山地下壕の建設時期や目的・用途等については諸説あるが、平成16年に館山市が行った大学教授や有識者、専門家等で構成するプロジェクトチームによる調査では、着工時期について「昭和19年初め」という見解が示されている。ところが、昨年、房日紙に赤山の起源について、「日米開戦(S16.12)前から、専門の工作部隊の手で密かに工事が進められ、開戦時には立派な地下要塞が完成していた」という記事(※)が掲載されていた。要するに市の指定史跡として公的な見解(着工時期等)について「再検証の必要性」を主張するものであった。

※館山基地で勤務していたという人及び赤山の近くで生まれ育ったという”市の有識者”の証言 **赤山地下壕の起源(着工時期)・・・「国防理念」と「建築法令」に解く鍵が!**

前述の証言は、目撃あるいは他人から聞いた伝聞と思われるが、これを立証できるものがなければ「〇〇という説もある」という程度で証言としての価値はない。工事記録が皆無であることから、開戦前の我が国の「国防理念」と「建築関係法令」の二点からこの問題(着工時期)を解明することにする。

○開戦前の国防理念・軍備の基本方針：「日本本土が直接、米国の攻撃(空襲、艦砲射撃)に晒されることはない」という前提に立っていた。必然的に「空からの攻撃を防ぐための築城施設の整備は必要ない」と言うことになる。

○施設整備のバイブル「海軍建築部令」には、「築城施設」についての規定は一切盛り込まれておらず、法的に根拠のない「築城施設」の要望・予算要求もできなければ、経験・ノウハウ(工事要領、マニュアル等)もない、要員養成の根拠もない等々

※証言の中の「専門の工作部隊」とは「設営隊」を指すものと思われるが、これは南方方面の飛行場建設のため急遽(S15~16年)編成されたもので、本土の工事のための設営隊(「内設」と呼ばれた)が編成されたのは、S18年末のことである。

このことから、証言の「開戦前から専門の工作部隊の手で密かに着工していた」という説は完全に否定できよう。施設関係者の悲願である「海軍建築部令」が改定されたのは、戦争半ばのS18. 8月のことであった。改定とともに築城施設工事のための諸準備に拍車がかけられ(前号で説明)、本格的な築城施設工事が始められたのはS19年に入ってからと考えるのが順当であろう。 <次号では、新説「赤山地下壕の内部構造と運用構想」について述べる>

<自称地域史探索マニア その27(3/4)>